資料３

金銅釣灯籠（こんどうつりとうろう）

＜概要＞

法　量　(A) 総高 34.2cm　笠径 31.3cm　火袋径 20.3cm　脚径 25.1cm
　　(B) 総高 34.8cm　笠径 30.0cm　火袋径 18.3cm　脚径 26.5cm
時　代　　室町時代　16 世紀

本品は、銅、鍛造、鍍金で、六角形の釣灯籠２基である。笠は宝珠（ほうじゅ）をいただき、上面を水平気味に作る甲盛（こうもり）[1]をもたせている。五曜形の煙出しを四方に透かし、吹返しは一枚板で作る十二弁花先（はなさき）形になり、下面は素文で、根元には猪（い）の目（め）形を透かしている。

火袋（ひぶくろ）[2]は欄間に五曜文を各面２箇所ずつ透かし、その間に「真清田大神宮」の文字を１字ずつ蹴彫（けりぼ）りする。羽目板（はめいた）には扉を含む各面ともに、十五枚笹紋と唐草を透かしている（現在の神紋は九枚笹紋）。笹葉（ささば）は裏からの刻点を連ねて鎬（しのぎ）をもたせ、丸輪も竹節を薄肉打出と蹴彫りで表している。脚はごく短い簡素な形の花先形で、わずかに外方に張り出している。

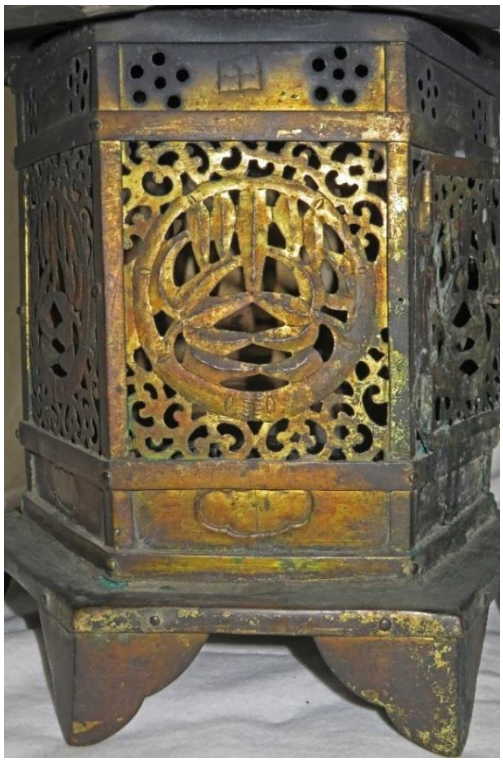
また、高さに比して火袋の径が大きく、笠の吹返しや脚が大きく張らないことから中世の釣灯籠の作風を見せるが、笠の甲盛に量感を持たせる点などは、桃山時代に顕在化した近世の釣灯籠の特色の先取りともいえる。永正十五年を前後する室町時代後半期の基準作例であり、愛知県下ではきわめて希少な中世の釣灯籠として重要である。

---

1 甲盛：蓋の表面が滑らかに盛り上がる曲面に仕上げられた状態のこと。
2 火袋：灯籠の火をともす所。

こんどうつりとうろう
金銅釣灯籠

（A）　　（B）



（A）

（B）

（愛知県教育委員会提供）